

大分県立芸術文化短期大学 研究紀要 第五十四巻 平成二十八年三月

サンドロ  
くボツ  
テイチ  
エリと  
フィ  
レンツ  
エく

狩  
谷  
新

(創作音楽劇)

# サンドロ ～ボッティチェリとフィレンツェ～

狩 谷 新

プロローグ

フィオレッタ「これはこれは万能の天才、レオナルド・ダ・ヴィンチさん、いつもお元気そうで」

レオ「恐れ多くも教皇の母君であられるフィオレッタ・ゴリーニさん」

フィオレッタ「よしてよ。息子が教皇になるのは、1523年、

45歳の時よ。私そんなにおばあさんに見える？」

レオ「16で生まれたとして61歳か、それはちょっとかわいそうかな？」

フィオレッタ「1452年生まれあなたは、71になるじゃない。そこまでお年寄りには見えないわよ」

レオ「ぼくらは今回、案内役だから、今、幾つかってことは、置いてこう」

フィオレッタ「私が10歳近く年下ってことは忘れないでね」

レオ「わかった、わかった。で、今は1444年だ。フィレンツェのオニサンティ教会の近くで、革なめし職人、マリアーノ・

フィリペーピの妻ズメラルダが4人目の男の子を生んだ」

フィオレッタ「お父さんもお母さんも1394年生まれだから、50歳の時の子供！」

レオ「超高年齢出産だ。長男のジョバンニは、1421年生まれだ

から、この時、もう23、こっちが父親でもおかしくないくらいだ」

フィオレッタ「すぐ上のお兄さん、シモーネとは一つしか違わないのよね」

レオ「赤ん坊の名前は、アレックスサンドロ・デイ・マリアーノ・デイ・ヴァンニ・フィリペーピ」

フィオレッタ「ヴァンニの息子のマリアーノの息子のアレックスサンドロってことね」

レオ「普段は略されてサンドロ」

フィオレッタ「長男のジョバンニが小っちゃくて太ってたから、ついたあだ名が小さな樽」

レオ「ボッティチェロ、父親が引退して、世帯主が長男になったから、ボッティチェロの弟のサンドロってことで、サンドロ・ボッティチェリってわけだ」

フィオレッタ「レオナルド・ダ・ヴィンチの年上のライバルが生まれたわけね」

レオ「ライバルになるのはずっと後だ。サンドロは、教育熱心だった父親に鍛えられて、14歳の時に19歳も離れた次男のアントニオの紹介で金細工師の工房に入る」

① 金細工工房 1463年 サンドロ 19歳

盛んにデッサンをしているサンドロ。

アントニオ登場。

アントニオ「金細工の工房にしては静かだな」

サンドロ「(デッサンを隠して) アントニオ兄さん！今、少し、休んで」

アントニオ「ごまかさなくてもいいさ（と、隠したデッサンを奪う）」

サンドロ「それは…」

アントニオ「サンドロ、やすりがけや彫金より、絵が好きか？」

サンドロ「…」

アントニオ「お前が暇さえあれば絵を描いてるって聞いてな。このまま続けさせていいのか、様子を見てこいって」

サンドロ「父さんが…」

アントニオ「そうだ。今、フィレンツェは、コジモ様のおかげで、建設ラッシュだ。金細工でも絵画でも才能さえあれば仕事はいくらでもある。出世も思うままだ。もし、お前の絵の才能が、確かなら、早いうちに方針を変えるべきだってな」

サンドロ「でもせっかく兄さんが紹介してくれたのに…」

アントニオ「俺のせいで夢をあきらめるのか？」

サンドロ「もし兄さんが許してくれるなら…」

アントニオ「俺は絵は素人だが、お前のデッサンには熱がある」

サンドロ「じゃあ…」

アントニオ「絵の何がいいんだ？」

サンドロ「金色は、美しいけれど、その美しさは他の色の中で一番輝く。僕にはそう思えるんです。絵ならその美しさを引き出せる」

アントニオ「わかった。でも父さんには、しっかりと自分の言葉で

お願いするんだぞ」

サンドロ「はい！」

## 幕間①

フィオレッタ「それでリッピの工房へ行くのね」

レオ「サンドロの家の隣はヴェスプッチの邸宅だった」

フィオレッタ「シモネッタの嫁ぎ先ね」

レオ「彼女が嫁いでくるのは一年後だ。1464年、二十歳になったサンドロは、ヴェスプッチ家の紹介もあって、当時、プラートで大聖堂の壁画を手掛けていたフィリッポ・リッピに弟子入りした」

フィオレッタ「ちょっと待って、それって、リッピが修道女を拉致して子供を作っちゃった頃じゃない？」

レオ「そうだ。ルクレツィアとの息子フィリッポ・ノが生まれたのが1457年、コジモ様のおかげで還俗したすぐ後だ」

フィオレッタ「リッピのタッチが変わってきた頃ね」

レオ「リッピはマリヤやサロメを描くときにルクレツィアをモデルにしたんだ。サンドロは、リッピが3年後にスポレートに引越すまで、リッピのところにいた」

## ② リッピの工房 1465年 サンドロ21歳

聖母子と二天使の前で、必死に模写しているサンドロ。

リッピ登場。

リッピ「教えに忠実だな」

サンドロ「リッピ先生！」

リッピ「砂糖と塩の違いが判るか？」

サンドロ「砂糖は甘くて塩は…」

リッピ「味のことじゃない。今まで弟子は大勢いたが、大抵は塩水だ。ある程度までは吸収するが、それ以上はこっちがどんなに

頑張っても一切受け付けない」

サンドロ「僕は、砂糖水：ですか？」

リッピ「そうだ。そそばに注ぐだけだ。どんどん吸収する。しかも粘り  
まで出てくる」

サンドロ「褒めていただけてるんですね」

リッピ「半分はな」

サンドロ「半分？」

リッピ「常温で水は2倍近くの砂糖を吸収する。お前はまだそこまで  
で甘くなっているんだ」

サンドロ「まだまだ修行中ですから」

リッピ「俺はお前のその余力が心配なんだ」

サンドロ「？」

リッピ「お前は俺を超えるだろう。いや、部分的にはもう俺を超え  
てる。フラ・アンジェリコと俺の違いが判るか？」

サンドロ「透明感：でしょうか？」

リッピ「俺の絵が濁ってるっていうのか？」

サンドロ「違います！どちらも美しいんです。でも美しさの違いが  
：。アンジェリコ先生の絵は神々しい美しさ、リッピ先生の絵

はもっと官能的で、香水が香るような美しさがあります」

リッピ「それは、愛の違いだな」

サンドロ「愛の違い？」

リッピ「そうだ。どんな画家も実際に聖母を見てはいない。何しろ  
1500年近く前の話だ。スケッチの一つも残っていないバー

ジンマリアを多くの画家が描いてきたわけだ」

サンドロ「理想の母を創造したことでですね」

リッピ「アンジェリコはそうかもしれない。俺だって、最初はそう

した。しかし、聖母が美しい女性であることは確かだ。ここで  
問題になるのは、美しいという概念じゃないか？」

サンドロ「何をもって美しいとするか？」

リッピ「そうだ。俺は今、ルクレツァを愛してる。未来永劫とは、  
言えないが、今は彼女が世界一美しい女だと信じてる」

サンドロ「それが愛というものですな」

リッピ「だから、俺は、彼女の美しさを絵にするんだ」

サンドロ「ルクレツァをモデルに？」

リッピ「そうじゃない。彼女を美しいと思うその思いを絵にするん  
だ」

サンドロ「そのままを描き写すんじゃないんですね」

リッピ「重要なのは、まず画家自身がモデルに惚れ込むことだ」

サンドロ「恋をしろってことですか？」

リッピ「女に惚れるんじゃない。その美しさを愛しむんだ」

サンドロ「美しさを？」

リッピ「言うのは簡単だが、実際には難しいぞ。所詮、俺にはでき  
なかった」

サンドロ「僕にできるでしょうか？」

リッピ「できるさ。飽和濃度50%でこの俺を超えようとしてるん  
だからな」

サンドロ「先生！」

幕間②

バラ園の聖母

フィオレッタ「サンドロの聖母子と幼児聖ヨハネ、バラ園の聖母  
ね」

レオ「サンドロがこれを仕上げたのは、ヴェロッキオの工房に来てからだが、明らかにリッピの影響を受けてる」

フィオレッタ「構図が左右反転、聖母子は二人とも顔はそっくりね。ヨハネはちょっと違ってるけど」

レオ「違うのは聖母子の目線だ」

聖母子と二天使と比較。

レオ「サンドロの聖母は明らかにお互いを見ている」

フィオレッタ「目を閉じてるじゃない」

レオ「それは頬をつけてるからだ。明らかに目線はイエスを向いてるだろ」

フィオレッタ「ヨハネはどちらもこの絵を見る人を見つめてるわね」

レオ「テクニクの一つだ。観客を舞台に引き込む効果があるんだ」

フィオレッタ「確かに一緒に見守ってるって感じがするわね」

レオ「リッピの紹介でヴェロッキオのところへやってきたサンドロは十分一人前だった」

フィオレッタ「そういえば、レオ、あなたそこにいたのよね」

ヴェロッキオ ダビデ像

フィオレッタ「かわいいじゃない。このダビデ、あなたがモデルなんでしょ」

レオ「十四の時だ。入ったばかりのまだガキだよ」

フィオレッタ「痛風病みのピエロの時代ね」

レオ「コジモが死んだのが1464年、孫のロレンツォが帝王学を学んでいて、フィレンツェが輝き始めた頃だ」

③ ヴェロッキオ工房 1468年 サンドロ 24歳

聖母子を描いているサンドロ それを見ているヴェロッキオ

(32)

ヴェロッキオ「まだ抜けきれないんだな」

サンドロ「6割くらいです」

ヴェロッキオ「砂糖水の話か」

サンドロ「ええ、まだヴェロッキオ先生の分が入っていません」

ヴェロッキオ「俺のは吸収しにくいのか？」

サンドロ「先生は、絵ばかりじゃありませんから」

ヴェロッキオ「今は大聖堂の円球と十字架にかかりきりだからな」

サンドロ「レオがいるじゃありませんか」

ヴェロッキオ「奴はむら気だからな。気を付けないとすぐいなくなっちゃう」

サンドロ「天才ですから」

ヴェロッキオ「うらやましいか？」

サンドロ「正直に申し上げても？」

ヴェロッキオ「遠慮はいらない」

サンドロ「うらやましくない、と言ったら嘘になりますけど、対抗

しようとは思いません」

ヴェロッキオ「勝負しないのってことか？」

サンドロ「僕はまだ6割の砂糖水ですから」

ヴェロッキオ「10割になったらどうなんだ？」

サンドロ「その時、どちらが優れているのか、決めるのは僕らじゃ

ありません」

ヴェロッキオ「そうなるだろうな。ロレンツォとは付き合っているのか？」

サンドロ「プラトンアカデミーで」

ヴェロッキオ「あの男。どう思う？」

サンドロ「強烈なエネルギーの持ち主です。生まれながらのリーダーですね」

ヴェロッキオ「弟はどうだ？」

サンドロ「ジュリアーノはチャーミングです。誰をも引き付ける」

ヴェロッキオ「二人がいればフィレンツェは安泰かな？」

サンドロ「それはどうでしょう」

ヴェロッキオ「戦争は困るぞ。俺たちの商売には大敵だ」

サンドロ「ロレンツォとジュリアーノは理想の兄弟です。富も権力も若さまで備えている」

ヴェロッキオ「それが仇になる」

サンドロ「自分より優れた者を排除しようとするのが人間です」

ヴェロッキオ「ピエロ様が健康なら…」

### 幕間③

フィオレッタ「そのピエロ様がなくなっちゃうのよね」

レオ「翌年、1469年だ。二十歳のロレンツォが全てを引き継いだ」

フィオレッタ「王様になったの？」

レオ「フィレンツェは王国じゃない。ヴェネチアと同じ共和国だ。」

この時期、イタリアにある王国はナポリだけ。残りは大公や侯爵が領有する大公国や侯国、そして、教皇領」

フィオレッタ「複雑ね」

レオ「共通してたのは言語と宗教だけだ。お金の単位も地方ごとに違ってた」

フィオレッタ「ドゥカートとフロリンね。どっちも金貨の名前でしょ」

レオ「フロリン金貨は純金を一定量含んでいて、最初の国際通貨と言われている」

フィオレッタ「同じ共和国でもヴェネツィアとフィレンツェは違ってたのよね」

レオ「そうだ。あっちはかなり進んだ民主制が出来上がってたが、フィレンツェはメディチ家が絶妙に組み立てたシステムで動いてた」

フィオレッタ「ほとんど独裁よね」

レオ「でも自由だった」

フィオレッタ「確かにロレンツォもジュリアーノも気さくだし、恋愛も自由。男女に限らずにね。男の人も春を売ってって、あなたも…」

レオ「俺が男を買ったのは、純粹に好奇心からだ。サンドロだって同じことをした」

フィオレッタ「あっちは訴えられなかったけどね」

レオ「俺だって結局は不起訴になった」

フィオレッタ「ロレンツォ自身、人妻に恋してたわ」

レオ「ルクレッツィア・ドナーティ。二十歳の記念の馬上槍試合のマドンナ、ロレンツォの永遠の愛人だ」

フィオレッタ「そのすぐ後でローマからクラリーチェを嫁に迎えるんだから、全く男の考えることって」

レオ「当時の正妻なんて、政治的な意味と後継ぎを作ることが目的だ」

フィオレッタ「クラリーチェは、お母様の厳しい審査をかいくぐっ

た立派な花嫁さんだったのよね」

レオ「六月二日から四日間、町を挙げての結婚披露だった。四百人を超える招待客はもちろん、千五百人分の食事がふるまわれ、最後にサンロレンツォ教会でミサが開かれた」

フィオレッタ「この頃はあなたもサンドロもまだ活躍してないのよね」

レオ「二人ともメディチ家の注文を一手に引き受けてたヴェロッキオのところから、絵は勿論、彫刻、金細工、部屋の装飾から紋章のデザイン、洋服や楽器、石の棺まで作ってた。サンドロは、自分の工房を持ってたから、忙しい時に手伝うだけだったけどな」

フィオレッタ「あなたまだ十代だったんでしょ」

レオ「そうだ。暇を見つけては、ブランカッチ礼拝堂に通って、フレスコの勉強してた」

④ サンタ・マリア・デル・カルミネ教会 ブランカッチ礼拝堂  
1470年 サンドロ 25歳

フレスコ画のスケッチをしているレオナルド(18)

サンドロ登場。

サンドロ「熱心だな。レオ」

レオ「(スケッチを続けながら) 早くあなたに追いつきたいですかね」

サンドロ「僕に 追いつく? レオ、7年前、今の君と同じ18の頃、僕はまだ金細工さるく出来なかったんだぞ」

レオ「7年後に追いついても意味がないんです。あなたが常に7年前に追いついてる」

サンドロ「それはどうかな。現に君はヴェロッキオの絵の殆どを仕上げてるじゃないか」

レオ「端っこの天使と背景を描いてるだけだ」

ヴェロッキオ キリストの洗礼

サンドロ「僕はあんなにきれいなポーズを見たことがない。あの絵に君の天使がいなければ、ほとんど価値がない」

レオ「でもあなたはヴェロッキオの絵だ! ボッティチェリさん、あなたは、とくに自分の名前で注文を受け、ピエロ・ポッライウオーロに並んでる」

ボッティチェリ 剛毅擬人像

サンドロ「あれは彼が期限までに仕上げられなかったから、回ってきた仕事だ」

レオ「だからって、誰でもよかったわけじゃない。背景はほとんど同じなのに、あなたの少女だけが、観る者に迫ってくる」

サンドロ「意思の強さを少女にしたことには批判もあるようだよ」

レオ「そのギャップがいいんです。ピエロがテーマを小道具で誤魔化しているのに、あなたは、剛毅を彼女の表情で描いた。マン

トの赤も象徴的だ」

サンドロ「生意気に見えないか?」

レオ「生意気に決まってるじゃありませんか! ひとの意見なんか聞くもんか! それこそが意思の強さです」

サンドロ「ハハハ!」

レオ「何がおかしいんです」

サンドロ「まるで君自身のことを言っているようだからね」

レオ「とにかく僕はあなたに追いつきたいんだ」

サンドロ「もうとくに追いつてるさ。僕がここに来たことでもわ

かるだろ？」

レオ「！」

サンドロ「君と同じ目的で来てるんだ」

レオ「フレスコの勉強に！」

サンドロ「そうさ。僕にはまだまだ吸収しなくてはいけないことが残ってる。君と同じだよ」

レオ「…」

#### 幕間④

フィオレッタ「一本取られたようね」

レオ「なんであんなに謙虚なんだ」

フィオレッタ「あなたとは正反対」

レオ「頼まれればなんでも描いてる」

フィオレッタ「そこもあなたとは正反対」

レオ「ラテン語までできるのに、哲学まで勉強してる」

フィオレッタ「あなたもコジモの図書館に通ったじゃない」

レオ「勉強は必要さ。でも議論は、時間の無駄だ」

フィオレッタ「プラトンアカデミーのことを言ってるの？」

レオ「ロレンツォやポリツィアーノと話合ってるんじゃない」

フィオレッタ「詩人の感性から受け取ることもあるんじゃない？」

レオ「すべては己の感性から生まれるんだ。借りものじゃしようがない」

フィオレッタ「あなたはすべて自己完結的だからね」

レオ「奴ら何話してたんだ？」

フィオレッタ「ちょっと覗いてみましょうよ」

⑤ ロレンツォの別荘 はるかにフィレンツェを望む 1472年

サンドロ27歳

ロレンツォ(23)、サンドロがワイングラスを傾けている。

ロレンツォ「サンドロ、ユディットの帰還を覗たぞ。映えて画家組合に認められただけはあるな」

サンドロ「ロレンツォ、あんな小さな絵をご覧になる時間が？」

ロレンツォ「時間は作るもんだ。首と胴体を裏表にしたのは見事だった」

サンドロ「ユディットの目的をはっきりさせたかっただけです」

ロレンツォ「首を切る直前じゃ残酷さが目立つからな。ドナテッロは、ユディットの美しさでカバーしようとしてたが…」

サンドロ「状況を一つの作品にまとめるのが彫刻ですから」

ロレンツォ「板絵の特徴を活かしたってことか」

サンドロ「裏にも絵を描けば、文字通り立体的に見ることができます」

ロレンツォ「二つの場面の同時性も表したってことだな。明暗もはっきりしてる。リアルな切り口はリッピか？」

サンドロ「洗礼者ヨハネです」

ロレンツォ「表の構図はヴェロッキオの「トビアスの帰還」」

サンドロ「さすが豪華王だ」

ロレンツォ「師匠二人を裏表にするとは芸の細かいことだ」

ポリツィアーノ(18)、ジュリアーノ(17)登場。

ロレンツォ「新しい教皇はどうですか？ロレンツォ？」

ポリツィアーノ「ホメロスをラテン語にお訳になったアンジェロ・ポリツィアーノ君、かすみを食ってるような詩人でも政治に興味があるのか？」

ポリツイアーノ「芸術に理解ある指導者なら、大いにあります。スポンサーの数は多いほうがいい」

ロレンツォ「それなら詩人に用はなさそうだな。シクトゥースなんていう1000年も前の名前を継いだ男の興味はもっぱら建物にあるようだ」

ジュリアーノ「ローマを作り直す勢いらしいぞ」

ロレンツォ「橋に自分の名前をつけるのはまだしも新しい礼拝堂までは、やりすぎだと思うがな」

ジュリアーノ「俺も橋を作るかな、ジュリアーノ橋、渡れるのは麗しき女性と俺だけの橋だ」

ポリツアーノ「礼拝堂は無理だからな」

ロレンツォ「ふしだらな修道院になるのがおちだ」

ポリツアーノ「青春は麗し　されど短し　恋せよ若人　明日は知れず」

ロレンツォ「詩人なら自分の言葉で話せ」

ポリツアーノ「豪華王にして偉大なる詩人へのオマージュでございます」

ロレンツォ「ジュリアーノにはそんな詩も必要ないだろう」

ポリツアーノ「目下のお相手は、サンドロの御隣人！」

ロレンツォ「麗しのシモネッタ！確かお前と同一年だ」

ジュリアーノ「シモネッタ、その美しさはルクレツティアにも勝る」

ポリツイアーノ「どうかなサンドロ？」

サンドロ「！」

暗転

ヴェロッキオ邸　1472年　サンドロ27歳

横向きでサンドロのモデルをつとめているシモネッタ（17）

シモネッタ「マエストロ？」

サンドロ「疲れましたか？シモネッタ」

シモネッタ「いえ、ただ、どうしていつも横からお描きになるのかわかって思ってます」

サンドロ「横顔を描くのは私だけではありませんよ。お気に召しませんか？」

シモネッタ「見つめられるだけなのが、ちょっと恥ずかしくて」

サンドロ「恥ずかしがっているのは私の方です。あなたのように美しい人の視線には耐えられそうもない」

シモネッタ「お上手ですね。そうやって何人の女性を口説かれたのかしら？」

サンドロ「いや、本当にそうなんです。見つめられるのは…」

シモネッタ、サンドロを振り返る。

サンドロ「止してください。本当に描けなくなる」

シモネッタ「マエストロ、どうか、お休みになってください。その間、私がお見つめます」

サンドロ「からかうと怒りますよ」

シモネッタ「どうぞ叱ってください。何も知らずに十五の時に、会ったこともない夫に嫁いできた世間知らずの小娘を」

サンドロ「シモネッタ、あなたはもう立派な女性です。しかも…」

シモネッタ「しかも？（サンドロに近づく）」

サンドロ「よししましょう。あなたにはジュリアーノが」

シモネッタ「誰からも好かれる魅力あふれるジュリアーノ。朗らかに、優しく、頼もしくて、ハンサムな上にチャームング、

フィレンツェはいうに及ばず、遠くヴェネツィア、ローマの女

も憧れる理想の男性」

サンドロ「そのジュリアーノが女神と崇めるのが貴方だ」

シモネッタ「あら、お兄様からも詩を送っていただいたわ」

サンドロ「ロレンツォが！」

シモネッタ「あの人たちにとって私は、カーニバルの賞品なの」

サンドロ「とても魅力的な…ね」

シモネッタ「マエストロ、殿方にとって理想の女性ってどんな人だ

かお分かりになる？」

サンドロ「美しくて、魅力的で、しとやかで、優しい…」

シモネッタ「それはすべて必要、でも十分ではありませんわ」

サンドロ「何が欠けている…と…」

シモネッタ「自分のものにならないなら、他の誰の者にもならない

こと」

サンドロ「あなたには夫が…」

シモネッタ「愛を見いだせないパートナーはいないのも同じ」

サンドロ「ジュリアーノとも？」

シモネッタ「手が届きそうで、届かないことが大切。誰かの手に落

ちてしまえば、そこでおしまい」

サンドロ「穢れなき乙女」

シモネッタ「静かにほほ笑むだけ。殿方は、一方でふしだらな女を

求めておきながら、もう一方で、私たちをガラスの箱に閉じ込

める」

サンドロ「シモネッタ…」

シモネッタ「マエストロ？乙女は恋を禁じられているの？」

サンドロ「愛しき人…」

二人強く抱き合う。

幕間⑤

レオ「サンドロが…、あのシモネッタと？」

フィオレッタ「男と女が二人だけで、長い間、一部屋にいたのよ。

何があっても不思議はないわ」

レオ「そのサンドロが、ジュリアーノの馬上槍試合で、その旗印を

描いたのか？」

フィオレッタ「勝利の女神シモネッタ・ヴェスプッチの肖像をね」

レオ「何て奴だ」

フィオレッタ「イギリスのBBCがこの頃の話テレビドラマにし

たの」

レオ「ダヴィンチズ・デーモンズ、主人公はこの俺様だ」

フィオレッタ「この頃、作品も少ないし、何をしてたかよくわから

かったから、作りやすかったんでしょ」

レオ「俺が天才だからじゃないのか？」

フィオレッタ「私の名前も変わっちゃてるし、史実としてはおかし

なところが多いんだけど、ポイントはシモネッタが出てこない

ところ！」

レオ「ルクレッツァは活躍するのにな」

フィオレッタ「大体シーズンスリーで終わりなんだけど、日本では

DVDもシーズン2までしか出てない」

レオ「人気なかったんだな」

フィオレッタ「とにかく、シモネッタはそれほど重要じゃないって

ことが言いたい」

レオ「でも肖像画は結構いっぱい残ってるよな」

フィオレッタ「サンドロは少なくとも二回描いてるし、ピエロ・

ディ・コジモも、そして、レオ、あなたも描いてるじゃない」

レオ「スケッチくらいしたかもしれないけど」

フィオレッタ「白貂を抱く貴婦人だって」

レオ「あれは、チェチーリアだ。ルドーヴィーコの愛人の」

フィオレッタ「でも似てるわよ。スケッチの人に」

レオ「美人は似るもんだ」

フィオレッタ「とにかくシモネッタは、はかないガラスの美しさを持った女性だった」

レオ「それだけの存在ってことか…」

フィオレッタ「崇められるだけの寂しさがあったの」

レオ「それでやらないのか？」

フィオレッタ「何を？」

レオ「ジュリアーノ二十歳のお披露目で行われた馬上槍試合」

フィオレッタ「やるわよ。この試合がないと、ポリツィアーノが詩を書かないからね」

レオ「最終決戦だな」

フィオレッタ「ファイナルゲームは勝ち残ったジュリアーノ・デ・メデイチの登場で、サンタ・クローチェ広場に集まった群衆は

大いに盛り上がる」

レオ「相手は？」

フィオレッタ「うまく負けることを命じられた哀れな騎士」

レオ「誰なんだ？」

フィオレッタ「誰でもいいの！」

レオ「そんな…」

⑥ サンタ・クローチェ広場 1475年 サンドロ 31歳

中央に馬上でマスクを上げ、槍を高々と上げるジュリアーノ！

上手にシモネッタとロレンツォ。下手にポリツィアーノとサンドロ。

大歓声。下手から従者が現れ、高くスカーフを掲げると静まる観衆。

スカーフが振り下ろされると猛然とスタートするジュリアーノ。その一撃で、相手は高くはじかれ、落馬する（スクリーン展開）大歓声に答えるジュリアーノ。駆け寄るシモネッタ。その祝福の口づけを受ける間、  
ポリツィアーノがリマベーラ 春の女神を読み始める。

恋の天使は華麗に矢を射るや

満足そうに闇の空に消え

小さな兄弟の待つヴィーナスの国に

そこには三美神が集い

その髪には花の冠が飾られる

好色なゼフィロはフローラを追ひ

花は咲き乱れる

プリマベーラも微笑み

その金の髪をそよ風になびかせ

無数の花で小さな冠を作る

美しきヴィーナスは皆に囲まれ

ゼフィロは草原を露で潤し

甘美な香りを醸し出す

フローラは大地を花で覆う

薔薇、百合、堇、深紅、純白、スカイブルー、淡いイエロー

草原は花たちの美しさで輝く

朗読の途中から、プリマヴェーラが浮かび上がる。

幕間⑥

レオ「プリマヴェーラか」

フィオレッタ「日本語では春って訳されてる。ポリツィアーノの詩「ヴィーナスの王国」から着想を得て、独自の世界を展開してるわ」

レオ「完成したのは1482年だ。7年も 後だぞ」

フィオレッタ「誰がいつ。この絵をサンドロに頼んだのか？いろいろな説があるみたいだけど、私はロレンツォだと思うの。ヴィーナスは次男、後のレオ10世を身籠っているクラリーチェ」

レオ「愛の天使が長男のピエロで、マーキュリーがジュリアーノ、そして、三美神の貞淑がシモネッタ、愛は…」

フィオレッタ「私よ。ジュリアーノの遺児を身籠ったフィオレッタ！」

レオ「春の女神じゃないのか？」

フィオレッタ「サンドロは私も描いてるのよ。ほらこれはどうみても愛の女神でしょ？」

レオ「春はメディチ家の愛で満たされてるってことか」

フィオレッタ「どうしてそんな絵になったのかを知るためにはメディチ家を襲った一連の騒動を見る必要があるよね」

レオ「発端はミラノ、フィレンツェの盟友、その軍事面を支えていたミラノで起こる」

フィオレッタ「ちょっと待って、先を急ぎすぎよ。その前にこの絵

が描かれてるのを忘れないで」

ラーマ家の東方三博士の来訪

⑦ サンドロの工房 1475年 サンドロ 31歳

ガスパーレ（45）と絵を見ているサンドロ

ガスパーレ「いやここまで見事にお願いを聞いていただけるとは」

サンドロ「それが仕事ですから」

ガスパーレ「三博士の筆頭がコジモ様、残りお二人をピエロ様とジョバンニ様のご兄弟、その後ろにロレンツォ様、左端にジュリアーノ様。メディチの三世代と同じ絵の中に私を溶け込ませてくださった」

サンドロ「その二人は逆に描いたつもりなんですが…」

ガスパーレ「これは失礼、でもご兄弟ですから、どちらがどちらでも問題ないでしょう」

サンドロ「ちゃっかり私も一緒にさせていただきました」

ガスパーレ「当然です。この絵は日ごろからメディチの皆さんとご交流のあらわれるマエストロでなければ、という作品なんですから。それにご自身を描かれるということは自信作でもあらわれるのでしょうか？」

サンドロ「東方三博士の礼拝は、何度も挑戦しているテーマですから、このような機会を戴けるのは、私としても嬉しいんです」

ガスパーレ「銀行家組合の一員として、拙宅にロレンツォ様をお迎えする、よい機会を与えて下さいます」

サンドロ「小さなものですが、ご活用いただければ幸いです」

幕間⑦

レオ「ホントに飽きずに同じテーマで描いてるな」

フィオレッタ「真面目なのよ。ちょっと前にも丸いのを仕上げてるじゃない」

東方三博士の礼拝（トンド）

レオ「こういうのはトンド絵っていうんだ」

フィオレッタ「それイタリア語で「丸い」って言うてるだけじゃない」

レオ「メダルのデザインから絵画の枠として発展させたのがイタリアだから、イタリア語で呼ぶのが礼儀ってものだ。サンドロはその先駆者のひとりで、この形式が従来の構図に大きな変化を与えてる」

フィオレッタ「前はマリア様が画面のどちらかに寄ってたのよね。確かサンドロも…」

東方三博士の礼拝 初期

レオ「こっちはリッピの工房にいた頃の絵だ。膝まづいてる博士の服の色で目を引こうとしているが、配色がバラバラで肝心の聖母子より行列のほうが目立っちゃってる」

東欧三博士の礼拝 ジェンダーレ・ファブリアーノ

レオ「聖母子の位置は反対だけれど、行列の人数が多いのにこのファブリアーノには遠く及ばない」

フィオレッタ「それで思い切って真ん中に持ってきたのね」

レオ「枠を円形にすることで、自然に目が中心にいくからな。このテーマで大胆に構図を変えたのは、奴の功績だ」

フィオレッタ「あなたも真似したのよね」

東方三博士の礼拝 ダ・ヴィンチのスケッチ

レオ「描きかけのスケッチなんか見せるなよ。こんなものは作品じゃない」

フィオレッタ「そこがあなたとサンドロの違いね。あなたは納得するまで仕上げないけど…」

レオ「奴は絵を仕上げてから反省するんだ。だから失敗作まで残っちゃう」

フィオレッタ「おかげで私たちは、彼の成長を見ることができるようよ。」

レオ「確かにラーマの方がはるかに安定しているし、このままトンド絵にしても立派に成立する」

フィオレッタ「自画像は切れちゃうけどね」

レオ「自分を入れたのはほんのお遊びさ。それにしても聖母に魅力がないな。俺のスケッチの方がよっぽどいい」

フィオレッタ「それは言ってるかもね。中途半端にリッピの影響が残ってる感じ」

レオ「奴が自分のマドンナを見つけるためにも話を進めて構わないかな？」

フィオレッタ「メディチ家を襲った一連の事件ね」

レオ「その日、フィレンツェ、つまりはメディチ家の軍事面を支えていたミラノ大公ガレアツォ・マリーア・スフォルツァは愛する聖歌隊の歌を楽しむにサント・ステファノ教会に向かった」

⑧ サント・ステファノ教会 ミラノ 1476年12月26日

サンドロ 32歳

ガレアツォ（32）が友を従えて正面から入ってくる。左右と

後ろから赤と白の衣装を纏った三人の暗殺者が近づく。

暗殺者「道を開けろ！」

一人が上手からガレアツォの左から上向きにナイフを突き刺し、下手の男が続く、

最後は背後から、胸を刺し貫く。暗殺者のうち二人はすぐに護衛に切り殺されるが、残りの一人は

逃げ去る。書記官の

チッコが大公を抱き起す。

チッコ「大公閣下！」

ガレアツォ「もうだめだ。これで、イタリアの…（こと切れる）」

チッコ「教皇はどうやら本気で、フィレンツェを狙うか…」

幕間⑧

フィオレッタ「そういえば、2年前に教皇は、銀行をメデイチから

パッツィに乗り換えてたのよね」

レオ「そうだ。貧困と卑賤の階級からのし上がった教皇シクトゥス

4世は、帝王学を学んだロレンツォのいうなれば正反対にいた

男だ」

メロツォ・ダ・フォルリ シクトゥス4世と甥たち

フィオレッタ「宗教家っていうより皇帝みたいよね」

レオ「4人の甥を引き立てて、教皇領の拡張を図ってた」

フィオレッタ「それでミラノ大公を…」

レオ「もちろん暗殺に関する公式の記録は残ってないがね。軍事的

にミラノに頼っていたフィレンツェを甥のジローラモに与える

布石だ」

フィオレッタ「金蔓を抑えられて、軍勢力も奪われたフィレンツ

ェ。ロレンツォ踏んだり蹴ったりじゃない」

レオ「同じ年にフィレンツェはマドンナも失った」

フィオレッタ「シモネッタが亡くなったのね」

レオ「ある意味、男にとつての理想の女性になったんだ」

フィオレッタ「もう誰の者にもなれないものね」

レオ「ロレンツォもジュリアーノもそれどころじゃなかった。財政

的にも軍事的にも穴埋めに必死だったんだ」

フィオレッタ「サンドロは？」

レオ「この頃からプリマヴェーラの制作を始めてる。どうやら、シモネッタを復活させようと思ったらしい」

⑨ サンドロの工房 1478年 初頭 サンドロ 34歳

職人たちが、フィリピーノ・リッピ（17）と一緒に八枚の板を

つなげようとしている。

フィリピーノ「ずいぶん大きな絵を書くんだね」

職人A「フィリピーノ、お前の親父さんでもここまで大きいのはな

かったな。縦2メートル3横3メートル14、これに石膏を6

ミリづつ二重に塗るんだ」

フィリピーノ「それだけでもかなり時間がかかるね」

職人A「この板をここまで乾燥させるのだって、かなりかったん

だ。絵を描けるのはまだだいぶ先だな」

フィリピーノ「マエストロはここにほとんど等身大の神様を描くみ

たいなんだ」

職人B「スケッチを見たんだな」

フィリッピノ「いつもより顔がはっきりしてた。かなり気合が入

ってたようだよ」

職人A「その絵もこのキャンパスが出来てからのことだ。さあ、急ぐぞ」

以後、両端で陰謀が巡らされる間、キャンパスづくりは続けられる。

上手に教皇（63）

教皇「メデイチの兄弟が目障りなのは確かだが、教皇として、わたしは誰の死も望んではおらん」

下手にフランチェスコとジローラモ。

フランチェスコ「ジローラモ様、教皇はあのようにおっしゃっておりますが」

ジローラモ「カソリックの代表が暗殺を指示できるわけがないだろう。ああ言うっておけば、後々言い訳が立つ。それより、叔父上の承諾は得たんだろうな？」

フランチェスコ「勿論です。事がなれば、フィレンツェのすべてを握るのは叔父ですから」

ジローラモ「貴様らパッツィ家がメデイチにとって代わるには、ロレンツォとジュリアーノ、二人を同時に亡き者にすることが絶対だ。その段取りは？」

フランチェスコ「フィゾレのパッツィ家の別荘に二人を招待します。フィレンツェから二マイルほどの処にあって、チャックにコジモが建てた修道院があるんです。そこならせん階段がありまして」

ジローラモ「爺さんの建てた修道院か、死ぬ場所としては悪くありません」

上手にロレンツォとクラリーチェ登場。

クラリーチェ「声もだせないくらい苦しんでいますわ」

ロレンツォ「二人で招待されてるんだ。俺だけが行っては、何を言われるか」

クラリーチェ「無理に連れて行って、ジュリアーノがあちらで倒れるほうが、より大きな問題になりましてよ」

ロレンツォ「今、内輪でもめ事を起こしたくはないんだが……」

下手にジローラモとフランチェスコ

ジローラモ「ジュリアーノがいない限り、ここでの計画は中止だ」

フランチェスコ「ジュリアーノはベッドの上です。人をやって、始末すればいい。なんなら私自身が行きます」

ジローラモ「本当に病気だと思うのか！二人同時に同じ場所で行けば絶対にダメだ。どちらが、残っても、フィレンツェは、俺たちの敵になる」

フランチェスコ「しかし……」

ジローラモ「二人が確実に現れる機会を狙うんだ」

フランチェスコ「そんな機会は、昇天祭くらいだ」

ジローラモ「構わんだろう。花の大聖堂で、盛大に弔ってやろうじゃないか！」

フランチェスコ「……」

ジローラモ「ここまで来てあきらめるのか！」

フランチェスコ「わかりました。決行は、昇天祭。場所は花の大聖堂」

中央のキャンパスが完成し、暗転。

幕間⑩

フィオレッタ「なんて人たちのぞ！」

レオ「教皇は、ウルビーノ公をたきつけてフィレンツェをイタリア

一の傭兵軍団で囲んだ」

フィオレッタ「ロレンツォはそっちが気になって、パッツィに対し  
てはノーガードだったのね」

レオ「ジュリアーノにパッツィ家から嫁をとることを考えてたって  
説もある」

フィオレッタ「そんなに大事なパッツィって」

レオ「第一回十字軍から活躍した由緒ある家柄だ。貿易と金融で地  
位も財力も十分蓄えてた。新興財閥のメデイチにとっては、う  
まく取り込むべき相手だったんだ」

フィオレッタ「相手はちっともそう思ってなかったってことね」

レオ「特にフランチェスコはパッツィ銀行のローマ支店にいて、ロ  
レンツォたちがいかに市民を掌握してたかってことを知らな  
かったんだ」

フィオレッタ「相手は単なる成金だと思ってたのね」

レオ「そして、運命の日はやってくる。フランチェスコは、寝坊し  
たジュリアーノを二分しか離れていないメデイチ家まで迎えに  
行って、大聖堂まで連れてきた」

⑩ サンタ・マリア・デル・フィオーレ 1478年4月26日

サンドロ33歳

聖歌隊の合唱の中、フランチェスコがもう一人の暗殺者とジュリ  
アーノを抱えるようにして入ってくる。

突如、服の下からナイフを抜き、ジュリアーノに突き刺し、続け  
て二人で突きまくる。

女性「キャー！」

椅子に座っていたロレンツォが振り返るとその瞬間、ナイフが彼

の首筋を掠める。

すぐ横に座っていたフランチェスキーが暗殺者を捉えようとし  
て、逆に切り付けられる。

フランチェスキー「逃げる！ロレンツォ」

ロレンツォ、転げるように席を立ち、祭壇左手の古い聖具室に飛  
び込む。

それを追った暗殺者を出席していた市民が囲む。

市民「パッレ、パッレ」

一人のつぶやきはやがてその場の大合唱に代わっていく。

市民は、メデイチの紋章に刻まれた玉を意味する言葉「パッレ」  
を叫びながら、暗殺者たちに鉄槌を下す。

暗転。

上手に現れるロレンツォ。

ロレンツォ「親愛なる市民諸君！大いなる不幸がわれらを襲った。  
このフィレンツェを、

そしてそこに住むすべての市民を誰よりも愛した男が卑劣な暗  
殺者によって、無残に殺された。

そして、第二の不幸は、その実行者が、他ならぬフィレンツェ

伝統の家名を持つ一族だったことだ。

私は、彼らを許さない。諸君、これが恥ずべき一族の姿だ！」

上方から、十体に及ぶ暗殺者の死体が一斉に落ちてくる。その首  
にかけられた絞首刑のロープ。

ロレンツォ「フィレンツェを汚した暗殺者の一族からは、そのすべ  
てを奪う！墓の名を削り取り、その血が一滴も残らぬよう娘の  
婚姻も禁ずる。この神聖なフィレンツェにその名を一切残して  
はならぬ」

幕間⑩

ダビンチの処刑スケッチ

フィオレッタ「これがあなたがその時描いたスケッチね」

レオ「そうだ。めったに見られない光景だったからな」

フィオレッタ「でも実際にこの姿をヴェッキオ宮の壁に描いたのは

サンドロなのよね」

レオ「その中に、枢機卿もいたんだ」

フィオレッタ「それを聞いた教皇は、ロレンツォもろともフィレン

ツェ自体を国ごと破門しちゃうのよね」

レオ「それはそうなんだけど、あれ、何か話が飛んでないか？」

フィオレッタ「そうかしら」

フィオレッタの肖像

レオ「そうだよ。お前の話だ」

フィオレッタ「やめてよ。これあんまし気に入ってないんだから。

それに私だとは限らないし」

レオ「こんな粗末な服を着た女をサンドロがわざわざ描くわけない

だろ。これは、ジュリアーノの子を身籠ったフィオレッタ嬢に

決まってる」

フィオレッタ「はいはい。私がフィオレッタです。確にお付き合

いさせていただいております！」

レオ「それで、生んだ息子がのちのクレメンス7世」

フィオレッタ「私が死んだずっと後のことよ」

レオ「この肖像画が描かれた1478年には生きてた。この絵のお

かげで、プリマヴェーラにも登場するわけだ」

フィオレッタ「あっちは愛の女神だからね。あっ比べなくていいか

ら！」

プリマヴェーラ

レオ「だいぶ理想化されてるみたいだな」

フィオレッタ「趣味が悪いわよ、ほんとに！この絵、まだ出来てな

いはずだし」

レオ「それは確かだ。教皇はナポリと組んで、本格的にロレンツォ

を追いつめようとした」

フィオレッタ「頼みのミラノは、摂政としてロレンツォと気脈を通

じていたチッコが粛清されて、ルドヴィーコ・イル・モールが

復活してたしね」

レオ「暗殺されたガレッツォの弟だ」

フィオレッタ「そのルドヴィーコと和平条約を結んだロレンツォは

単身、ナポリに乗り込むのよね」

上手にロレンツォ登場。

ロレンツォ「フィレンツェ市民諸君。私は、私と我が弟との流血に

端を発したこの戦争が、神の御手にあって終結に導かれること

を願って、ナポリに旅立つ。ローマはこのロレンツォに名指し

で責任を問われた。わが命一つでこの町が救われるなら、喜ん

でささげよう。フィレンツェは私に多くの名誉と栄光を与えて

くれた。誰にもましてフィレンツェに献身し、命をもささげる

ことこそ私の務めなのだ。私の生も死も、私を益することも害

することも、等しくわがフィレンツェに役立つことを信じて！」

歓声。暗転。

フィオレッタ「ナポリは教皇と協定を結んだんじゃないっけ？」

15世紀イタリア勢力図

レオ「このころのイタリアはまさに群雄割拠。日本の戦国時代ほど

じゃないけど、各地に領主がいて分裂してた。その中での五大

強国といわれたのが、フィレンツェ、ミラノ、ヴェネチア、ナポリ、ローマなんだ」

フィオレッタ「ローマっていうのは教皇領ってことね」

レオ「この中で、軍事的にはナポリとミラノ、経済的にはフィレンツェとローマが有利で、ヴェネツィアはどちらもそこそこってところだった」

フィオレッタ「この5つが、くっついたり離れたりしてたわけね」

レオ「ロレンツォはミラノをけん制しておいて、3か月かけてナポリと条約を結んだ」

フィオレッタ「圧倒的に有利じゃない」

レオ「それでも教皇はあきらめない。ヴェネツィアを引き入れてきた」

フィオレッタ「きりがないわね」

レオ「でもこのフィレンツェ存亡の危機を回避したことで、ロレンツォはその地位を確定的なものにしたんだ」

フィオレッタ「祖国の父と呼ばれたおじいさんのコジモに並んだったことね」

レオ「そうだ。君主論を書いたマキャベリは、ロレンツォを強運の持ち主といってる」

フィオレッタ「教皇に打ち勝つの？」

レオ「オスマントルコが、ナポリのオトラントに侵攻してくるんだ」

フィオレッタ「それって、イタリア全体の危機じゃない」

レオ「それで、内輪もめしてる場合じゃないってことになって、五大強国が一丸となる」

フィオレッタ「破門も解かれたの」

レオ「そりゃあそうさ。異教徒と戦うには、カトリックが多いほうがいいだろ」

フィオレッタ「この頃、サンドロは聖母子を描いてるわけ」

レオ「奴にしては、聖母をはっきり描いてる」

フィオレッタ「言いたいことはそれだけ？」

レオ「他にあるのか？」

フィオレッタ「ちょっと見てみましょうよ」

⑪ サンドロの工房 1480年 サンドロ 36歳

書斎の聖母を仕上げているサンドロ。

食事を運んでくるフィリッポ（19）

フィリッピーノ「食事です。マエストロ」

サンドロ「ありがとう。ちょうど一息入れようと思ってたところだ」

フィリッピーノ「だいぶ出来上がりましたね。あれ、これは（スケッチを取り上げる）」

サンドロ「レオが描いたブノワの聖母だ」

フィリッピーノ「ずいぶん若いマリアですね」

サンドロ「ハッハッハ、そうかもしれんが。ポイントはそこじゃない」

フィリッピーノ「優しいような表情？」

サンドロ「この絵は、ヴェロッキオの聖母子を改良して、お前の父さん、リッピ先生の聖母子と二天使まで遡った上で改良してあるんだ」

フィリッピーノ「色合いからやさしさがでてるんでしょか？」

サンドロ「立体感だよ。レオは余計な背景を省いて、構図を完成さ

せ、幼子と母親が見つめるものをより際立たせてる」

フィリピーノ「イエスが見ているのは」

サンドロ「白い十字型の花」

フィリピーノ「受難の象徴ですか？」

サンドロ「そうだ。それにマリアの左手に握られたオリーブの枝」

フィリピーノ「イエスが捕まったオリーブの山」

サンドロ「私も真似させてもらったんだ」

フィリピーノ「イエスが持っているのは……」

サンドロ「いづれ自分の腕と足を貫く三本の釘といばらの冠だ」

フィリピーノ「それで、マリアは悲しそうなんです」

サンドロ「レオは天才だよ。手の向きやその形で、二人の関係性を

見事に描き出してる」

フィリピーノ「マエストロだって！でも……」

サンドロ「何か気になるか？」

フィリピーノ「なぜマエストロの聖母はいつも目を閉じてるんです？」

す？」

サンドロ「ジョットの教えに従ってるだけさ」

フィリピーノ「わが子を見つめる聖母」

サンドロ「そうだ。自然に伏し目がちになる」

フィリピーノ「でもマエストロのマドンナはちょっと極端じゃありませんか？」

サンドロ「見つめられるのが怖いんだろうな」

暗転。

幕間⑪

フィオレッタ「ほめてるじゃない」

レオ「人物画は、見るものが人物たちの態度によって容易に彼らの気持ちを感じられるように描くんだ」

フィオレッタ「サンドロはそれをあなたから学んだってわけね」

レオ「なんでも吸収しちゃうんだ」

フィオレッタ「真面目なのよね」

フィオレッタ「破門が解かれたすぐ後に、サンドロはローマに行ったのよね」

レオ「教皇の名を冠した礼拝堂にフレスコ画を描くメンバーに選ばれたんだ」

フィオレッタ「あなたは？」

レオ「選ばれるわけないだろ、ろくに作品を仕上げてないんだ」

フィオレッタ「ベルギーノ、ギルランダイオ、コジモ・ロッセリと一緒にいったのよね」

レオ「当時、ローマにはろくな画家がいなかったからな」

⑫ システイーナ礼拝堂 1481年 サンドロ 37歳  
ベルギーノ(33)、ギルランダイオ(32)、コジモ・ロッセリ(32)とサンドロが中央で配置図を検討している。

ベルギーノ「必要なのは左右に14枚、正面と後ろに2枚づつすることになるな」

サンドロ「ベルギーノ！それは大きな部分だけだろ、教皇の肖像も

分担したほうがよくないか？」

コジモ「こりゃあ相当の大仕事だな。いかに早描きのこのコジモといえども……」

ベルギーノ「正面に向かって右がキリスト、左がモーゼの一生ってことになる。そうだなギルランダイオ」

ギランダイオ「そうだ。キリストが降臨、洗礼、誘惑、使途の召命、山上の垂訓、鍵の授与に最後の晩餐そして復活か、ここまで指示書ができてれば何とかなるだろ」

コジモ「イエスやモーゼの顔は揃えるのかい？」

ペルジーノ「必須のアイコンさえ合わせとけば何とかなるだろ」

ギランダイオ「足場を組んで早速始めるか」

ペルジーノ「一つ断つとくことがある」

コジモ「教皇やその親類縁者を描き込めてことだろ」

ペルジーノ「それもあるが、このフレスコの制作は公開されるんだ」

ギランダイオ「おいおい冗談だろ。俺たちは見世物じゃねえぞ」  
ペルジーノ「いつもより稼げるんだ。それくらい我慢してくれ。サ

ンドロが3枚、ギランダイオが2枚、コジモが3枚で、俺が5枚引き受けよう」

サンドロ「残り3枚は？」

ペルジーノ「シニョレッリが2枚にトゥッチが1枚だ」

コジモ「全部がフィレンツェ制ってわけにはいかなかったんだな」

ギランダイオ「別に揉めることもなからう。仲良くやろうや」

サンドロ「それにしてもローマってところは、工事だらけだな」

コジモ「教皇様は建設大王だからな。教会、病院、橋まで、新しく作ったり、修繕したり、大変な騒ぎだ」

ペルジーノ「活気はあるがその分、治安は最悪だ」

ギランダイオ「せいぜい気を付けようぜ」

サンドロ「見物がくるのはいただけくないが、工房だと思えば、これほど大きなところもない。金の心配もない」

コジモ「たらふく食って、大いに飲んで、早く仕上げてフィレンツ

ェへ帰ろう！」  
全員「オー！」

#### 音楽演奏

演奏の間に壁画が出来上がっていく。

モーゼの試練 完成

ペルジーノ「モーゼの試練：か」

サンドロ「指示書通り、7つの試練を並べたんだが：」

ペルジーノ「エジプト人の殺害、逃亡、羊飼いを追い払い、水汲み、草履を履いて、神の啓示に、旅立ち、というわけだな」

サンドロ「流れは表現できたと思うんだが：」

ペルジーノ「いや見事なもんだ。ポーズがその時々状況を的確に表してる。サンドロ、お前さんの絵からは、物語が浮かび上がってくる」

サンドロ「それがテーマなんだが：」

モーゼへの反逆

ペルジーノ「モーゼの反逆でも、同じ左への流れがうまく出せてるじゃないか。身の危険を感じ、懲罰の通告、その執行。試練の静かな仕草と対象をなす激しい動き：」

サンドロ「それぞれのエピソードはそれなりに描けてる：と思う  
：」

ペルジーノ「なんだ。何が不満なんだ？」

キリストの試練

サンドロ「この構図をどう思う？」

ペルジーノ「二つの悪魔からの誘惑とキリストの拒絶を背景にしちまったことか？」

サンドロ「それなりの効果はあるはずなんだが……」

ペルジーノ「小さくなっているが、逆にキリストの試練がはっきりわかる構図なんだろう」

サンドロ「これは……絵……なんだろうか？」

ペルジーノ「それはお前さんの考え方次第だろうな」

サンドロ「ペルジーノ、気づいてるだろうが、この絵の構図は、あなたのと同じだ」

天国のカギの授与

ペルジーノ「左右対称なんて珍しくもないぞ」

サンドロ「これは、絵だ。テーマが美しく描かれた上に、絵画としての美しさを持っている」

ペルジーノ「そうかもしれない。しかし、税金をめぐる議論と石でなぐられそうになるイエスはちっとも目立たない。後ろの凱旋門におべんちゃらを書いてごまかしてる」

サンドロ「『シクトゥス4世よ、汝は豊かさという点ではソロモンに劣るが、この巨大な神殿を献上した宗教心と信仰において、彼に優っている』」

ペルジーノ「教皇はともかく、文句を言うやつも多いぜ」

サンドロ「あんたは忠実に遠近法を守ってる。だから、この絵は絵として美しい」

ペルジーノ「美しくなければ絵じゃないって、ことか？」

サンドロ「当たり前だろう」

ペルジーノ「違うな。お前さんは勘違いしてる。俺に言わせりゃ、お前さんの絵の方がよほどよく出来てる」

サンドロ「どこがだ。これに比べれば俺のは、単なる挿絵だ」

ペルジーノ「挿絵で何が悪い。俺たちは挿絵を頼まれたんだ」

サンドロ「！」

ペルジーノ「グーテンベルグとかいう輩が、印刷機なんてものを発明したらしいが、聖書をいくら作っても、それを読める奴がどれだけいるっていうんだ」

サンドロ「確かに絵にすれば、物語は伝わるかもしれない」

ペルジーノ「それが目的なんだ。そのために今まで大勢の絵描きが苦勞してきたんじゃないのか？」

サンドロ「絵としての美しさは意味が無いっていうのか？」

ペルジーノ「そこまでは言っていない。わかりやすさと美しさには相通じるところがあるからな。だがな、重要なのはわかりやすさの方だ。確かにお前さんのキリストの試練は、奇妙だ。エピソードだけが遠近法に従っていない」

サンドロ「だから、美しさが……」

ペルジーノ「だが、わかりやすい。ユダヤの犠牲とイエスの受難が、はっきり繋がってる。お前さんは優れた物語作家だ。俺の絵でわかるのは鍵の受け渡しだけだ」

サンドロ「絵としての美しさを犠牲にしても分かりやすさを目指せて言うのか？」

ペルジーノ「そのバランスを取るのが俺たちの仕事だ。美しさを追求したければ、それを願うパトロンを見つけろ」

サンドロ「！」

幕間⑫

フィオレッタ「そのパトロンはフィレンツェにいたのよね」

レオ「メディチの一族だ。奴らがサンドロに求めたのは宗教画なんかじゃない。ジュリアーノの馬上槍試合がきっかけだったが、

そこへ鎮魂の意味も加わった」

プリマヴェーラ

フィオレッタ「不思議な絵よね」

レオ「同じ縮尺の神々を7人、同じ縮尺で並べ、天使を使って三角構図を保っているが、背景は黒く塗られ、人物が浮き立つ。これは、キリストの試練の失敗を活かした結果だろう」

フィオレッタ「こっちが先だったんじゃない？」

レオ「そうかもしれないな。いずれにしてもサンドロは、挿絵を嫌って、絵を描きたかったんだろう」

フィオレッタ「きれいだよ」

レオ「ここに描かれているのは、神かもしれないが、リアルな人間だ。その美しさを称えているんだ」

フィオレッタ「ロレンツォはこの絵で癒されたのね」

レオ「でもシモネッタはまだ横顔だ」

⑬ サン・マルティノ・アッラ・スカラ病院 1482年 サン  
ドロ 38歳

受胎告知を前にサンドロとフィリッピーノ。

フィリッピーノ「ガブリエルはいま着いたところなんです」

サンドロ「動きを表現しなかったんだ」

フィリッピーノ「フレスコ画もすっかりマスターなされた」

サンドロ「ローマでさんざん苦労させられたからな」

フィリッピーノ「ガブリエルのポーズはヴィーナスの西風ですよ」

サンドロ「あっちは、もう少し、角度をつけてる」

フィリッピーノ「こっちは着地直前ですから」

サンドロ「消失点を左に寄せてみたんだ」

フィリッピーノ「横長の壁に立体感を加えて、より広く見えるように、でしょ」

サンドロ「フィリッピーノ、君に教えることはもうなさそうだな」

フィリッピーノ「でもまだ聖母は目を閉じてる」

サンドロ「ヴィーナスはしっかり目を開いてるさ」

ヴィーナスの誕生

その絵を挟んでサンドロとフィリッピーノ。

フィリッピーノ「永遠を思わず女神 色香に迷う西風に運ばれ 輝く  
貝にそそと立つその髪は乱れ 天の神は微笑む」

サンドロ「ポリツアーノの海から生まれたヴィーナス。上手く描き  
表わせたかな？」

フィリッピーノ「それ以上です。風の強さまで感じられる」

サンドロ「ようやく女性の美しさを：描けたような気がするんだ」

フィリッピーノ「これこそマエストロの乙女です」

サンドロ「昔、フィリッポに言われたんだ」

フィリッピーノ「父さんに？」

サンドロ「そうだ。愛する人の美しさを描けと言われた」

フィリッピーノ「モデルにしろってことですか？」

サンドロ「ハハハ、お前はあの時の私と同じだな。そのままを描く  
んじゃない。惚れぬいた相手の中に潜む美しさを紡ぎだすん  
だ」

フィリッピーノ「そろそろマリアも目を開けるんでしょうか？」

サンドロ「それはどうかな」

幕間⑬

ダヴィンチ 受胎告知

レオ「古い絵を持ち出すな」

フィオレッタ「一応比較しとかなないとね」

レオ「俺がこれを仕上げたのは1472年、8年も前だ」

フィオレッタ「仕上げた絵が少ないんだからしょうがないでしょ。」

サンドロはこの絵からもたくさん学んでるし」

レオ「ガブリエルの右手とマリアの左手だな」

フィオレッタ「最初の絵では、二人とも腕を体から離していないけど、10年後には…」

受胎告知 1490

レオ「そっくりに描きやがった。それにしても同じテーマで何度も

描く奴だ」

フィオレッタ「注文があったからよ。サンドロはまじめですから」

レオ「一つ断つとくが、奴のマリアがいつも目を閉じてたわけじゃ

ないぞ」

海辺の聖母子 1477

レオ「小さな板絵だが、1477年にこの絵を描いてるんだ」

フィオレッタ「確かに目を開けてるけど、何かうつろね。イエスの

方が心配してるみたい」

レオ「小さな絵で試してみたが、納得いかなかったようだな。翌年

こんなのも描いてる」

聖母子と八天使

フィオレッタ「シモネッタの面影があるわね」

レオ「その二年後には再び目を閉じる」

マニフィカトの聖母

フィオレッタ「目は閉じてるけど表情は豊かだわ」

レオ「そして、さらに7年後、一度試した構図でこうなる」

メラグラアーナの聖母

フィオレッタ「ヴィーナスじゃない！」

レオ「つまりシモネッタってことだ」

フィオレッタ「ヴィーナスがマリアになるのに二年かかったってことね」

レオ「その少し前、物語画家としての代表作も描いてる」

⑭ プラトンアカデミー 1485年 サンドロ 41歳

パラスとケンタウロスとヴィーナスとマルスの前でくつろぐロレンツォ、サンドロ、ポリツィアーノ

ポリツィアーノ「暴君シクトゥス4世も身罷り、わがロレンツォは、ペンの剣より強しことをこの絵の真実を実証して見せた」

ロレンツォ「そして軍神マルスは心地よき眠りにつく、というわけだ」

ポリツィアーノ「ビーナスはまさしくクラリーチェだが、マルスは

ロレンツォには見えないが」

サンドロ「ロレンツォはパラスのつもりでしたが」

ポリツィアーノ「それはないだろ、パラスもクラリーチェだ。そして、哀れなケンタウロスこそナポリで幼馴染といちゃついたりを責められるロレンツォ！」

ロレンツォ「じゃあマルスは誰だっていうんだ」

ポリツィアーノ「この美形はジュリアーノだろうな。死してなおその美しさは失せず」

ロレンツォ「詩人とは思えぬ、薄っぺらな観察だ。そんな程度の解

「積しかできんのなら、このプラトン・アカデミーから除名だな」

ポリツィアーノ「どうせなら、二年前、レオナルドを追いやったミラノに送ってくれ。あっちの方が、気がよさそうだ」

サンドロ「なぜ、レオを？」

ポリツィアーノ「近親憎悪さ。一つの国に、王は一人でいい」

サンドロ「ロレンツォは政治の王、レオナルドは芸術の王…か、ロレンツォ、ポリツィアーノを追い出すのはまだ早い。この詩人の目はまだ曇っていないぞ」

ロレンツォ「何を言ってる。ろくに約束を守らないくせに、金ばかりかかるあいつに、ミラノの金を使わせるために送り込んだんだ」

ポリツィアーノ「散々浪費させて、足りなくなった金を貸し出す！

かくて豪華王の銀行が儲かるってわけだ」

ロレンツォ「戦わずして勝利する切り札ってことだ」

サンドロ「でも、レオは新たな武器を作るかもしれない」

ロレンツォ「空を飛んで、海に潜る、万能兵器か？」

ポリツィアーノ「人が考えつくものは、いずれ必ず、この世に現れる」

サンドロ「初めに言葉ありき！」

ロレンツォ「ヨハネの福音書か？奴が熱心なキリスト教徒だとは思えんがな」

サンドロ「レオの神は科学です。彼に言わせれば、神も人が思いつくからこそ存在する」

ポリツィアーノ「理不尽なものは、全て神の思召し」

サンドロ「レオはあいまいさを許さなかった。神は認めても、神に

頼りはしなかったんです」

ロレンツォ「サンドロ、お前はどうかんだ？」

サンドロ「私には、まだまだ学ぶことが…」

ロレンツォ「サンドロ、俺は二十歳で重荷を背負わされた。一つ間違えば、命どころか国を滅ぼしてしまいそうな決断を迫られ、こまめで、どうか、走り続けてきたんだ」

サンドロ「それが今、実を結んでいるじゃありませんか」

ロレンツォ「確かに新たな教皇とはなんとかやっていけるだろう。ジュリアーノでは果たせなかったが、ジョバンニは枢機卿になれるかもしれない。だからといって、俺が下した決断のすべてが正しかったといえるだろうか」

ポリツィアーノ「それは誰にも分らない。時は残酷に過ぎ去るのみ。決してもとには戻れない」

ロレンツォ「サンドロ、俺はお前たち芸術家が羨ましいんだ。肉体が消えても作品が残る」

サンドロ「確かに絵は残るかもしれない。でも、それは決して単なる絵ではない。私たちが、名も知らぬギリシアの芸術家から受け継いだものはなんです。決して石の彫り方だけじゃない」

ポリツィアーノ「人の思いが連なっていく」

サンドロ「絵や彫刻、詩や音楽、それはすべてその思いをつなぐ術です。人は一枚の絵から、そこに描かれている物語を紡いでいく。成し遂げた成果をくみ取るんです。誰かが何かをしなれば、絵も音楽も生まれない」

ロレンツォ「サンドロ、そこまでわかっているのなら、お前も自分の思いを絵にしたらどうだ」

サンドロ「私自身の…」

幕間⑭

フィオレッタ「この頃からマリアがシモネッタになっていくのね」

レオ「そうだ。しかし、このころから、ロレンツォもサンドロも迷路に迷い込んでいく」

フィオレッタ「迷路？」

レオ「もう一度この二枚を比べてみる」

マニフィカトの聖母とメラグラーナの聖母

レオ「幼子や囲んでいる天使たちの表情を見てくれ」

フィオレッタ「うつろな顔が増えてるわね」

レオ「特にイエスがそうだ。マリアとの繋がりで希薄になってるじゃないか」

聖母子と四天使と六聖人

レオ「サン・バルナバ祭壇画だ。今度はシモネッタだけが少し生氣を取り戻して、ほかのすべての人物がうつろな目をしている」

フィオレッタ「ポーズも奇妙ね。イエスも妙に生意気そう。タッチは、はっきりしてるのに印象が弱くなってる」

レオ「バラバラなんだ。サンドロに比べればロレンツォの方がまだましだったかもしれない」

フィオレッタ「痛風に苦しんでたのに？」

レオ「肉体的な痛みは、死んでしまえば消える。ロレンツォは死を意識してから、信仰に頼って、すべての罪を償って、47歳で死んだからな」

フィオレッタ「死んでも消えない痛みって？」

レオ「というより、死ねないことの辛さだ」

フィオレッタ「確か、ダンテの神曲の挿絵も描いてたのよね」

地獄編 全図

レオ「すべてのエピソードの挿絵を描こうとしてた」

⑮ サンドロの工房 1495年 サンドロ 51歳

神曲のデッサンに取り組んでいるサンドロ。そこへ寄った兄シモーネ(53)が入ってくる。

シモーネ「相変わらず、ダンテか」

サンドロ「兄さん、今日は荒れてるようだね」

シモーネ「お前は誰のためにそんなもの描いてるんだ。パトロンのメデイチは追放されちゃったんだぞ」

サンドロ「強いて言えば、自分のためかな」

シモーネ「それなら、サヴォナローラの教えに従えばいい。本来のキリストの教えに立ち戻るんだ」

サンドロ「試してみたさ」

シモーネ「試す？お前は神を疑うのか？」

サンドロ「もし、サヴォナローラの教えがすべて正しいのなら、はじめはあんなに熱狂していた人たちが何故離れ始めてるんだ？」

シモーネ「理解が足りないんだよ。自由を取り戻したい？フンッ！快楽を懐かしむ輩は地獄に落ちりゃいいんだ」

サンドロ「それは、憎しみかい？」

シモーネ「ああ憎しみだ。奴らは人間じゃねえ」

サンドロ「そうかな。確かに私も彼の教えに従って、手元にあった

作品を燃やした」

シモーネ「後悔してるのか」

サンドロ「美しいものを愛するのは罪なのかな？」

シモーネ「それが、快楽につながれば罪深い。決まってるだろ」

サンドロ「そうやって、いま、質素に暮らして、天国で待っている

のはどんな世界なんだ？」

シモーネ「やすらぎだ」

サンドロ「それは美しい世界じゃないのか？」

シモーネ「崇高な美しさだ」

サンドロ「その美しさを地上で見せるのは罪なのか？」

シモーネ「！」

サンドロ「憧れを絵にして、多くの人に知らせるのは蔑まれるようなことなのか？」

シモーネ「それを誤解する奴がいる限り、罪だ」

サンドロ「もし、その理想の世界が示せないとしたら、人はどうやって天国を夢見るんだ。希望の光が見えなければ、苦痛に耐えられるほど人は強いのか？」

シモーネ「それを克服した者だけが救われるんだ」

サンドロ「イエスはすべての人の罪を背負って、自らを犠牲にしたんじゃないのか？」

シモーネ「信じる者を救ったんだ」

サンドロ「その信仰のすばらしさを伝えるためにこそ、美しさがあるんじゃないのか？」

シモーネ「…」

サンドロ「兄さんでも答えられないようだな。私にもわからない。しかし、ダンテの言葉の美しさは理解できる。ダンテの中に答えがあるような気がするんだ。だから…」

エピローグ

レオ「1504年、サヴォナローラを処刑して。再びメディチ家を受け入れたフィレンツェは、ミケランジェロのダビデを市庁舎

前に設置する」

フィオレッタ「サンドロは設置委員会のメンバーだったのよね」

レオ「このころはもう抜け殻だ」

聖母の嘆き

フィオレッタ「マリアがリアルね」

レオ「挿絵画家として役割を果たそうとしたんだろ。悲しみをストリートに表現してる」

フィオレッタ「わかりやすいけど」

神秘の降誕

フィオレッタ「きれいなね」

レオ「フィレンツェが災厄から抜け出すことを願って描かれた最後の大作だ。華やかだが…」

フィオレッタ「やっぱり挿絵なのね」

レオ「1500年に仕上げた。この後、死ぬまで、ほとんど絵を描いてない」

フィオレッタ「辛かったでしょうね」

レオ「65歳で身まかると、生まれた家の隣の教会に葬られた」

フィオレッタ「聖アウグスティヌスが描かれたところね」

レオ「そして奴は300年も忘れられてしまったんだ」

フィオレッタ「作品はたくさん残ってたのに？」

レオ「プリマヴェーラやヴィーナスは表に出ていなかったからな」  
フィオレッタ「フィレンツェに生まれ、フィレンツェで亡くなった」

レオ「ロレンツォは街を作り上げて絶頂期で死んだ」

フィオレッタ「サンドロは、街の転落も見てしまったのね」

レオ「盛り返しはしたが、もとは戻らなかった」

フィオレッタ「大食漢で明るかったって言われてるけど…」  
レオ「サンドロ・ボッティチェリの喜びも苦しみもすべては作品の  
中に残ってるんだ」

様々な作品とフィレンツェの景色がモニタージュされ、ヴィーナ  
スの誕生で幕。

#### 参考文献

佐藤幸三著『図説 ボッティチェリの都 フィレンツェ』河出書房  
新社

ジョルジョ・ヴァザーリ著 古玉かりほ編 梶谷美加訳 『ボッ  
ティチェリとリッピ』 芸術新聞社

京谷啓徳著『もっと知りたいボッティチェリ 生涯と作品』 東京  
美術

杉全美帆子著『イラストで読むルネサンスの巨匠たち』河出書房新  
社

松浦弘明著『図説 イタリア・ルネサンス美術史』 河出書房新社  
イヴァン・クルーラス著 大久保康明訳『ロレンツォ豪華王』河  
出書房新社

マルチェロ・シモネッタ著 熊井ひろ美訳『ロレンツォ・メデイチ  
暗殺』早川書房

森田義之著『メデイチ家』 講談社現代新書

エンツォ・グアラッツィ著 秋元典子翻訳『サヴォナローラーイ  
タリア・ルネサンスの政治と宗教』 中央公論社

ジローラモ・サヴォナローラ著 須藤祐孝訳『ルネサンス・フィレ

ンツェ統治論 説教と論文』無限社

塩野七生著『わが友マキアヴェッリ フィレンツェの存亡へ1』

新潮文庫

ウィキペディア フリー百科事典 関連項目

デヴィッド・S・ゴイヤー脚本テレビドラマ『ダヴィンチ・デーモ  
ンズ』BBC